性的少数者とジェンダー ―いちれつきょうだいを考える―

おやさと研究所主任
堀内　みどり　*Midori Horiuchi*

はじめに

「いちれつきょうだい」は天理教の教えを代表するひとつで、たとえば、天理教啓発委員会はこれを標語とし差別のない社会に向け研修会を実施している。その機関誌『世界ろくぢ』には、次のような一文がある。

> 「ろくぢ」とは『ろっくの地』即ち平らな地を意味する。教祖は何処に住む者も同じ魂であり、また、身体はみな親神様よりお貸しいただいているもので、お互いはきょうだいであると教えられた。（後略）（最終頁）

1．ジェンダー：社会的・文化的性

「性」については多くのことが語られてきている。ここでのジェンダーはそうした性の特徴を表す概念の一つとして使われているものである。生物学的性に対する、「社会的・文化的に形成された性」のことを言う。男性性・女性性、男らしさ・女らしさ、性別役割などのことで、たとえば、「女性 (男性) は～すべき」と考えられているようなことで、これらは時代・文化・地域によってさまざまに異なること・可変的であることが知られている。ジェンダーは以下の内容を持つ。

① 社会が求めている性規範／性役割
② 社会・文化がイメージしている性のありよう
③ 性自認と社会の見る目／「どう生きていくのか」
④ 性的指向性

したがって男女という性的二元や異性愛が普通と考えられている社会において、そこに入りきれない人、同性愛や両性愛あるいはいずれも恋愛対象としないものは、「普通ではない」ということになる。古くからあるホモフォビア（同性愛者への偏見と差別、暴力）は宗教・文化とかかわっているとも言われる。

2．性的少数者／ＬＧＢＴ

性的少数者は、何らかの意味で「性」のあり方が非典型的な人のことで、セクシュアル（セクシャル）・マイノリティ、性的少数派、性的マイノリティ、ジェンダー・マイノリティなどと呼ばれる。一般的に同性愛者、両性愛者、トランスジェンダー／トランスセクシュアル（性同一性障害当事者含む）などが含まれる。

性的少数者は性的二元（二別）に入らない。セックスでさえ男か女に分類できない（遺伝子・内分泌・性器などから）人や、外性器・内性器に混乱（インターセックス、両性具有、半陰陽）がある人は、常に一定数存在してきた。また、自分の「身体」の認識が生物学的性と一致しない、違和感がある、「身体」が女性（男性）であっても、自らを男性（女性）と認識（性自認）し、それに会わせたライフスタイルを築きたいと思っている人もいる。L：レズビアン（女性の同性愛者）、G：ゲイ（男性の同性愛者）、B：バイセクシュアル（両性愛者）、T：トランスジェンダー（性別移行（性同一性障害）を含む）は、そうした性的少数者を代表することばである。かつては「病気」「異常」とされたこともあったが、今日ではこうした自らの「性」や、自らの「性の有り様」を告白（カミングアウト）することもかつてよりは可能な状況になっている。

3．神の子ども＝「一れつきょうだい」

天理教では人間は皆神の子どもであると言われる。「おふでさき」では、

このよふを初た神の事ならば
せかい一れつみなわがこなり（四 62）
せかいぢういちれつわみなきよたいや
たにんとゆうわさらにないぞや（十三 43）

と教えられ、

この人をどふゆう事でまつならば
一れつわがこたすけたいから（十三 85）

とも言われる。「おさしづ」でも、

> 「世界中人間は一列兄弟。一列は神の子供や。……神からは子供に難儀さしたい、不自由さしたい、困らしたいと思う事は更に無し。」（明治 20.12.1 補）
>
> 「よう聞き分け。一列は神の子である。憎い可愛の隔て無い。日々に可愛皆諭すやろう。」（明治 30.8.2）

と諭される。では、「いちれつきょうだい」のように生きるとは、どういうことなのか。差別や偏見を持たないというだけのことではない。『稿本天理教教祖伝逸話篇』には次のような逸話がある。

> 「よう帰って来なはったなあ。これを上げましょう。世界は、この葡萄のようになあ、皆、丸い心で、つながり合うて行くのやで。この道は、先永う楽しんで通る道や程に。」（135「皆丸い心で」）

また、「人を助ける心になれば我が身助かる。これまでの所互い立て合い助け合いの話の理、これは諭する理、人を助けるには誠の一つの心の理が人を助けるので我が身助かる。」ということもしばしば講話の中でも教えられてきた。つまり、親神は人間を「一れつわがこたすけたい」と思われていて、人間同士は「神の子ども」であるから、「互い立て合い助け合い」をしながら、丸くつながっていく関わり、有り様を目指していけるということである。そして、親神がこの世に生まれ出された一人ひとりは、

このはなしみな一れつハしやんせよ
をなじ心わさらにあるまい（五 7）
をやこでもふう〳〵のなかもきよたいも
みなめへ〳〵に心ちがうで（五 8）

という存在でもあり、その「ちがう」心を使って「ろくぢ」の世界に向かうことになる。では、現実的にどうすることができるのだろう。まずは、「知る」ことから始まるのではないか。差別や偏見の多くが、「知らないこと」「思い込み」に依っていることは珍しくない。当事者の「声」「思い」を聞くことによって、その問題の所在が明らかになっていくだろう。

おわりに

講座では、最近のニュースからいくつか紹介した。自分が「異常ではないか」と長年思い悩んでいた当事者の思い、「同性パートナー法」、「レインボープライド」、カミングアウトした人びとからのメッセージなど、性的少数者のこと、その置かれている状況などを示すものであった。しかし、世界では、「死」に値するものとして特に同性愛者への厳罰化も見られる。また、天理教では「ぢいと天」とにかたどられて「ふうふ」がつくられたと教えられる。実際の夫婦がそうであるように、これは陽気ぐらしのためのもっとも基本的な「人間関係」と考えられる。子を授かること、子を育てること、仲良く暮らすという、互いにたすけあうこと、自らの徳分を生かし自分として生きること、……。この在り方は誰にでも通ずるものであり、互いは出直しながら、成人していけるように守護されている。